

Exhibition #12

野間 祥子

白いさなぎ

2022年11月19日-2023年1月19日



—ご出身は愛媛県？

愛媛県の今治市です。東京に出てくる18まで今治でした。

—小さい頃から絵は好きだったんですか？

絵は、好きだったと思います。たぶん……。

—たぶん？

どんどん小さい頃の記憶って薄れていきますせん？ そんなことないですか？ 私はすごくそをつく子どもだったので。たぶん根っからうそつきなので。ふりかえったときに、本当にそれがあったのか、自分がいま都合のいいように作っているのかが自信なくて。小さい頃どんな人間だったかが、思い出せないんですけど……絵は描いていたんです。それは間違いないはずなんです。

—記憶は思い出すたびに作り替えられるものだと思います。絵が身近にある環境でしたか？

いや、そうではないですね。美術館もそんなに行った記憶はないですし……。

—ご親戚に野間仁根という大御所の画家がいらっしやるんですね。

それはもう、大学入るくらいに意識して。

—子どもの頃はそういう意識はなかった。

家に掛軸や絵は飾ってあったので、まったく絵から離れた環境ではなかったです。

—どうして美術大学に進もうと思ったんですか？

高校は県立の普通科でしたが、2年生のときから松山市の予備校に通ったんです。ただ私は遠方なので、毎日行くのではなくて、土曜日の午後のコースでした。

—美術部には入っていなかった？

高校になって入ったんですけど……中学からずっと吹奏楽部だったんです。

—楽器は何をやっていたんですか？

クラリネットをやっていました。ピアノも昔からやっていたので、どちらかというと音楽の方が真面目にやっていました。高校も吹奏楽部に入った

んです。でも進路はなぜか美大に(笑)。2年のときに吹奏楽部をやめて、美術の予備校に行くことになったんですけど、それが本当に嫌で嫌で。吹奏楽部を続けたかったですよね。だから今でもリコーダーを吹き散らしています。

—吹奏楽部はやめなきゃいけないかったですか？

当時は甲子園に行く野球の強い高校で、応援に行かなくちゃいけないし、演奏会もあるから。まあ、両立するという道もおそらくあったんですけど、そんなにいっぺんにできるほど器用ではないので、泣く泣くやめて。

覚悟をもって美術の道へ行くぞ、という目標があったわけではなかった

—そのときから美術志望だった。

進路を決めるのは早かったですね。大学には行きたかった。そして、それを応援してくれる家庭ではあったんです。

—音大と美大では迷わなかった？

音大に行くつもりはなかったです。音楽は好きで。何で美術の大学を選んだのかは、私もわからないですよ……

—友だちに誘われたというわけでもなく。

美術部のなかで美大に行きたいと考えている人と一緒に見学に行ったんですけど、結局、予備校に通ったのは私のほかに2人いたのかな。でも友だちが行くからというわけではなくて。1年のときから模試に美大の名前を書いていた。



—大学受験は油絵科を受けていた。

今考えたらおかしな話なんですけど、日本画は師弟関係が厳しいという謎の情報を聞いて。音楽の世界もそういうのが強くありましたし。それに日本画は、試験は水彩だけど、大学に入って岩絵具という別の素材になるのなら、油絵かな、と。

—予備校に行く情報も入りますよね。

予備校は良い意味で情報を閉ざしてくれて。とにかく基礎をしっかりと、デッサンすればいいから、と言われて。私は覚悟をもって美術の道に行くぞ、という並々ならぬ目標があって進んだわけではないので。消去法で美大に行った感じです。

—東京の美大に行きたいという気持ちは。

愛知県立芸術大学が第一志望だったんです。オープンキャンパスにも行って。武蔵野美術大学や多摩美術大学は試験で初めて来て。東京、それも私立大学の発想はなかったんです。だから武蔵美は受かったけど、愛知県芸が落ちた段階で、浪人しますかね、と言ったら、予備校の先生が、来年武蔵美に受かる保証はないぞ、と。

—そうだったんですね。

そういうものなのか、と(笑)。それで愛知県芸に落ちたその足で東京へ来て部屋を探して。お金のことが気になっていただけで、武蔵美の環境は知らなかった。いま思えば、愛知に受かったらそういう道もありましたけど、武蔵美で良かったですね。人数が多いので、いろんな人間に会えたのがいちばん大きな財産でした。

手放せなくなるような楽しさを優先して水彩画を選んだ

—武蔵美に入って、油絵ではなく水彩を選んだ。

武蔵美のカリキュラムは1年生のあいだに他学科の科目を選択できるので、油絵を2枚くらい描いてから、デザインだったり、日本画やキュレーションの授業をとって、最後に油絵の授業に戻るというタイミングで、キャンバスを張っているときに、ピシャーと、あと4年間私はキャンバスを張るのか、という疑問がわいてきたんですね。考えてみれば油絵を描いていて、ずっと違和感があったので……受験の頃だと、それでも6時間や12時間で仕上げ、次、次、となっていたので、そこまで考えることもなかったんですけど、1ヶ月近い課題の期間に、ずっと油絵をさわっていると、踏み込むほどのめり込める何かを私は油絵に抱いていなくて。振り返ったら、油絵を触っていない期間があっても、私は別に描きたいと思わなかった。絵は描いていても油絵ではなかった。だから最後の課題は油絵以外のものやってみようと思って、当時持っていた水彩や色鉛筆、インクを使って、同じ1ヶ月近い期間だったんですけど、信じられないくらい没頭できて。水で描くことはやっていたはずなんですけど、長期間じっくり向き合ったことはなかったんですね。それで、あ、水性の絵具だな、と思ったのかな。

—水彩の効果がしっくりきた。

ずっと線が引けるんですね。今思えば油絵で



もできるんですけど、当時は油絵具の質感に自分の気持ちが負けていて。もっとさらさらでいいのにな、という……身体的な不快感と言ったら失礼ですけど。

—油絵は強すぎた。

油絵のなかのすごく狭いところしか知らないときの判断で、ちょっと早すぎたなと思いつつ、それ以上に水で描いたときのフィット感と言いますか、あ、これこれ、という感じはあったので。自分の描きたいものに素材がどうという考え方ではなくて、扱う自分がわくわくするようなことがないと続かないんじゃないかな、と。信念とかよりも、やって手放せなくなるような楽しさを優先して。それから油絵は描いてないですね。

—先生からは何か言われましたか？

1、2年のときはいろんな素材と触れあって自分の表現を探っていく段階なので、どんなものを扱っていても特に何も言われることはないんですけど、3、4年になってくると、徐々に、これで油絵描くんじゃ、という言葉は、ご指導のなかでいただくことがあって。よく、油絵を描く前に水彩のエスキースを描く人はいたので……

—習作と思われていた。

これをさらに発展させるのでは、とよく言われていましたね。

—野間さんにとっては最終的な表現だった。

とにかく水彩の技術的なことは教わったことがないので、自分でやってみて、何でこうなるんだろうと、いろんな実験をして。画材の扱いでいっぱいだったんで、油絵とか、そんなこと言われても……という感じでした。

—水彩の技術を美大で学ぶことはないですね。

日本で水彩学科はないですからね(笑)。

—可能性を追求する素材とは思われていない？

うーん、たしかに。それは……そう思います。やっけて、伝授できる技術もないよな、とよく思います(笑)。



ここにずっといたかった 2022年 アルデバラン版画紙、透明水彩 A1 (594x841mm)

自分の舵だけで山道をのぼって血だらけになったのは良い思い出です

—それでも自分で工夫しながら開いてきた。

最近では、水彩の描き方を教えるとしたら何を伝えるんだろう、と技術的な教本を見ているんですけど、当時はかたくなに見なかった。それが知りたいわけではなかったんで、とにかく、もっとこうしたいんだよな、と描いてたんです。知識の裏づけがあると怖くてできないようなこともやりました。誰も教えてくれないからこそ、自分の舵だけで山道をのぼって血だらけになったのは良い思い出です。先に本を読まなくてよかったと思います。

—最初から知識があるわけではなかった。

油絵から水彩が変わったときは、ただ扱うものが変わりましたというだけの認識だったので、まったく画材のことは考えていなかったです。本

を読んでいれば、紙の白を大事にしなさい、とか書いてあるんですけど、そういうことは4年間終わってようやく気づいた。そう思うと傲慢でしたよね。私が軸にあって、画材は私の意志を反映する道具という認識が強かったので、無茶な扱い方をしました。何であれだけ教授が油絵と言っていたのかという真意が……君の絵は別に水彩で描く必要のない絵だよ、ということだったのかと。油絵科だから油絵を描けとは言われないので、そこを勘違いしていたな、と気づきました。

—そのあと大学院に進みました。

水彩を一生扱っていけるという手応えは感じていたんですけど、私のやっていること自体は水彩じゃなくてもいいとわかって、進む道としては、それでも水彩をやり続けるか、だったら油絵などの複合的な表現でやるか、というふたつがあって……いや、水彩だな、というのは変わらなかった。

—水彩の特性を生かそうと。

でも、このままだと、いくら私が描きたいと言っても、絵がそれを求めている。この素材でなければ描けないというものを作っていかなければ、私は水彩に見捨てられるな、と気づいて意識が変わりました。何が水彩らしいのかと大学院の2年間で考えて、それが今も続いている状態です。

—まわりからの作品に対する評価も変わってきた。

大学4年生のときの卒業制作に対する教授の評価と、大学院の修了制作に対する評価の報告書を見なおすと、学部ときは、油彩や混合技法、アクリルなども試して幅を広げると良いだろうと書いてあるんですけど、院になると、水彩をやってきた自分なりの解釈が完成度のある、というふうに評価は変わりましたし、大学院になってから油絵を描けばと言われたことはなかったです。

—具体的には、どこが変わりましたか。

一番わかりやすいのは、紙の白に対する自分のアンテナがまったく違うことです。それが良いか悪いかは置いておかなくてはならないんですけど、かならずしも白を生かして描く必要があるわけではないんですが、絵を描くときに、紙の白のどこを残そうかと考えずに自分のイメージをぶつけていた頃と違って、紙の白は一回絵の具を乗せてしまうと二度と戻らないと気づいてから、白の残し方を丁寧に考えるようになりました。

自分のチャンネルをあわせていったら、紙の数だけやりたいことができる

—紙はしっかり選んでいる。

紙自体の性格が違うので、良い紙とか悪い紙があるとは私は思っていない。ただ、それが得意である紙か、得意じゃない紙かというのがあるだけで、自分の表現にあわないと、この紙は使いづらいと言いたくなる気持ちもわかるんですけど、こっちがチャンネルをあわせていったら、紙の数だけ自分のやりたいことができるんですね。

—こういうことを試したいから、それにあった紙を選ぶとか。

徐々にそういうこともできるようになって、これを生かしたいからこの紙でいこうとか。もちろんコントロールしきれないわけじゃないですけど、やりたいことに向いている紙を選ぶようになりました。

—和紙と洋紙の違いは？

定義はややこしいんです。もともと洋紙という言葉は日本に西洋の紙と技術が導入された際、使い分けるためにできた言葉なので。

—日本画と洋画と似ていますね。

日本はずっと手漉きだったので、それに対して機械で抄かれたものは洋紙という考え方があったんです。和紙の原料として使われている靱皮繊維ではなく、木材繊維を主原料とした機械抄きの紙を洋紙と言っています。でも実際、両者が混ざっているので厳密な分け方は難しい。ひとことで定義はできませんが、どちらも植物の繊維からつくられていて、基本製法に則りながら原料、工程の差異で品質に違いがありますね。私は水彩紙と版画用紙と和紙をそれぞれ使っています。

—版画用紙の特徴は？

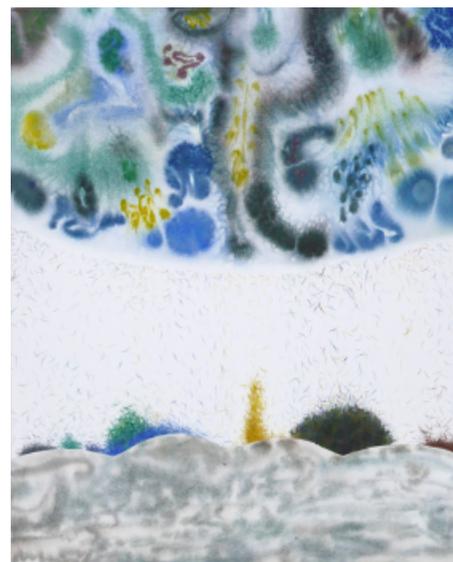
版画用紙は、リトグラフやシルクスクリーン、銅版にあわせて作られているので、水彩紙とは違う独自の発色をするんです。でも水にはある程度耐えられるように加工されています。すごく細かい加工の違いで言うと、水彩紙よりにじみの止め方が弱いんですけど、表面は吸い取ることを想定しているので、水彩紙に比べるとデリケートですね。

—あまり筆でこすってはいけないんですね。

水彩画は……あまり水彩画という感じもしないですし、水彩画かどうかはわからないんですけど……今までは自分と水彩だけでいっぱいだったんですけど、今年から大学で教えなくてはならない立ち位置になって、水彩の歴史により視野を広げて、私は水彩をどう見ているんだろう、と少し引いた目線で見れるようになってきたのが最近の変化です。



タネマクジュウリョク 2022年 ファブリアーノ水彩紙、透明水彩、墨、インク F80 (1120x1455mm)



ゆっくりわすれる 2022年 セザンヌ水彩紙、透明水彩 F12 (606x500mm)



秘密 2022年 アルシュ水彩紙、透明水彩 B2 (728x515mm)

—2016年には、美術新人賞のグランプリや童画展の大賞を受賞されていますね。

大学はありがたい環境なんですけど、やっぱり長く見てくださっているからこそその評価になつてくので、一回人間関係を取り払って、絵だけでどういう評価がもらえるかという意味では、コメントをいただけたことも、賞に結びついたことも嬉しかったですね。

—人間関係とは違うところで絵を見てほしかった。

人の評価を知りたいというピークはあの時でした。それからはずっと、人に見てもらいたいと欲する気持ちが薄くなってきているので。

—それはどうしてですか。

いや、わからない。

—描き続けてはいるんですよね。

そうです、そうです。見てもらいたいという気持ちは、2019年あたりから、もうゼロに近くなつていて。こんな不誠実なことやってちゃダメだと思つて。でも展示の予定は先々まで決まるものなので、来年になったら少し変わっているかなと思つたりするんですけど、ここ数年まったくなので……。だから油絵を教える機会は、全然違うことを勉強するので良いのかもしれないですね。

心臓っていう言葉、 心臓じゃない言い方でできるか

—絵のモチーフは。

水とか魚とか、植物が多いですかね。まあ、全部枯れているんですけど。あと人ですね。

—どういうふうを選んでらるんですか。

手に入りやすいもの(笑)。写真を見て描くのが得意ではないので、どうしても手近なところで。

—実物を見て描く。

実物を持ち込んで描く感じですね。手に入りやすいもの。ゴーヤもいっぱい描きましたし、クリもいっぱい描きましたけど。

—箱に入れて保存しているんですね。

箱をつくるのが趣味で(笑)。ストレス発散に箱を壊すので、とにかくたくさん箱をつくって、定期的に解体するんですけど、気に入ったら少し加工して小物を入れているんです。

—作品のタイトルのつけ方が面白いですね。

学部生の頃は、描いていることが自分の感情に寄つていて、タイトルそのまま絵と同じことを言っている堅苦しい感じだったんですけど、大学院のときに、タイトルのつけ方について考える機会があつて。ある先生が自分のつけ方を教えてくださったんですね。単語と単語をいくつも書き出して、それを線で結んでタイトルをつける、という。つまり、絵のことをそのまま言つて、より絵が強くなるものもあるんですけど、まったく違うものが組み合わさつて面白いという、絵と言葉の……

—裏切りのような。

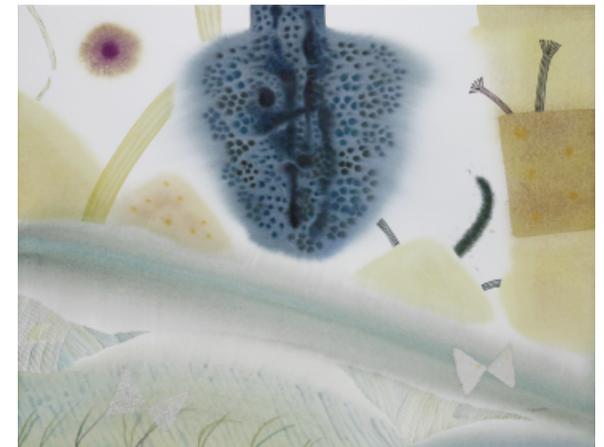
そういうことを体感して。それから、大学院のときに言われたのが、君の絵は絵本的で200文字くらいタイトルをつけた方がいいんじゃないって(笑)。当時は絵本的って言われるのが、弱さというか、あんまり嬉しい言葉ではなかったんですけど、まあでも、絵だけで自立できなくて、タイトルと合わさつて自立できるのもいいんじゃないかなと思つたんですね。当時好きな作家のひとりに、スタシス・エイドリゲヴィチウスがいて。

—あ、スタシス。

スタシスの絵本を見たとき、絵本なのに話のすじみちは特になくて、どのページから見ても成り立つし、そのページだけで終わつていて。タイトルでもあり、物語的な解釈もできるけど、タイトルを見ずに絵を見るよりも、タイトルを見た方が、より絵が引き立つ、面白く感じる。そのことに気づいたので、タイトルを作品の一部というよりは、同じくらいの質量で考えるようになって。今までは、こう思っているから、よし、これだ、ポーンって出てきた言葉を、日本語を日本語に訳すような作業と言いますか、それですつとつけてきているんですけど……



うつくしい旅 2022年
ハーネミュール版画紙、透明水彩
B1 (728x1030mm)



デンハサカサマ 2021年
BFKリープ版画紙、透明水彩、胡粉、白墨
P15 (500x652mm)



蛹のコーラス 2022年
BFKリープ版画紙、透明水彩
F30 (727x910mm)

一言い換えるということですか。

隠喩とか暗喩とかと似ていると思うんですけども、たとえば過去につけたことのあるタイトルだと、心臓という言葉、心臓じゃない言葉で表現すると、どういう言い方ができるかなということで、つけたのが「水のふところ」というのがひとつあって、あと「ぜいたくな体温」というのもあって、そういうふうに、描きたかったもの……描きたかったかどうかともわからないんですけど……制作しているときに何となく意識していたものを、まず素直な言葉で出して、それを別の言い方にする。日本語の好きなところは、漢字、カタカナ、ひらがなと、いろいろな表記ができるので。漢字は見たときの意味が広がりますし、ひらがなは先に音が入ってくるとか、そういうことも少しずつ気にしながら、しっくりくるまで、なるべくメモして、漢字か、ひらがなのかも組み合わせながら……やっぱりビタってくる瞬間があるんですね。それまでは試行錯誤するんですけど。絵を描いていて、10割ができたということになるんだしたら、6~7割がいちばん悩ましくなるので、方向性をもう一回、自分につきつけると言いますか、この絵はどうなっているんだろうっていうのを、タイトルをつけながら考える。

—絵ができてからタイトルを考えるのではない。

できてから決まるものもあるんですけど、難航しているときは、タイトルを先に考えて、そっちに寄せてみようとか、タイトルのおかげでモチーフが見えてきて、よし、これを描いてみよう、となって。

—絵のモチーフも描きながら考えるんですね。

そうです、そうです。

—言葉が定まることによって、方向性が見えてくる。

ひとりっていう単語が出てくるんだしたら、あえてふたり描いてみるとか、ひとつにするとか、道すじが見えますし、タイトルがしっくりきたけど、まだこのタイトルで描きたいっていうときは、同じタイトルで描いているものもいっぱいあります。

絵に向きあっている時間が短い方がうそをつけない

—絵は、描く時間の存在が重要ですね。

水彩は時間をかけられないのが私にあっているところですね。

—油絵は乾かす時間がある。

水彩はサイジングといって、繊維のなかに水がしみこむんじゃなくて、表面に水がとどまって表現できるよう加工されているんですけど、湿度や光によって、それが抜けていく。たとえば梅雨時期に一ヶ月手を加えないと、水彩は日本画と違って粒子が細かいので定着せず落ちることはないんですけど、100%の状態、メーカーさんが意図したものからは外れる。自分はすぐうそをつく人間だから、向きあっている時間が短い方がうそをつけない。日記はまったく書かないんですけど、そのときどきのことが形として残っていると感じます。

—ひとつの作品は短期間で仕上げる。

短いと思いますね。1枚だけではなく、何枚か並行して描いて、10枚描いて1枚良いのができればいいというモチベーションでやっています。たとえば、ダメだった絵のときでも、あまり複雑に試行錯誤の足し算引き算ができないので、悪くなったらカットして素材として使うか、裏紙として使うか、結構次々やっていくなかで、良いものをピックアップするイメージです。長くても1カ月ちょっと。天気が悪いとヒヤヒヤしちゃうって、いつサイズ抜けが起きるか……

—サイズ抜け。

サイズ抜けとか、風邪ひきってという言葉でよく表現されるんですけど、紙が風邪をひく。にじみ止めが抜けてしまうから、早く描かなきゃって。辛抱強くないので、気質にあっていると思います。

—東京に住むことには、あまりこだわりがない。

もちろん12年もいたからこそ、もういいやって思えるんですけど。絵を見てもらいたてのときには、せめて東京にいないと見てもらえないんじゃない



もっとうさぎ 2021年
木炭紙、透明水彩 F6 (410x318mm)



だれも知らない 2019年
ムーラントウゲ版画紙、透明水彩 F12 (500x606mm)



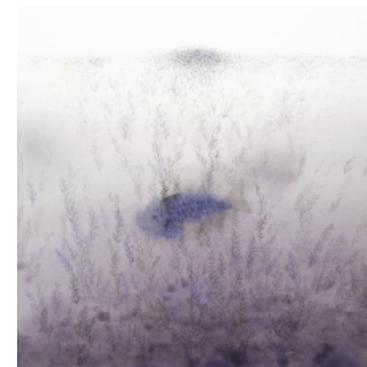
アリとキリギリス 2019年
ハーネミュレ版画紙、透明水彩、白墨 F4 (333x242mm)



うそが満ちる 2015年
ニューブレタン版画紙、透明水彩 B3 (364x515mm)



蝨 2019年
ハーネミュレ版画紙、透明水彩、白墨 202x260mm



おくびょうな声 2016年
木炭紙、透明水彩 S8 (455x455mm)

かと思っていたんですが、今は、人に見てもらいたいという気持ちが徐々に薄れていくのであれば、東京にしがみつかなくてもいいのかなど……

—新しい場所に行きたい。

滞在制作はずっと興味があって、水彩の特性で言うと、その場の風景をそのときにとどめられるというか。本当は屋外で制作しやすい素材なんですけど、私は現場の仕事っていうのをまったく手をつけてこなかったの。水彩をやるなら、その場に行って、そこでやるっていうことをやりたいというのがあるので。東京にいてもできるんですけど、こういう決断力のない人間は思い切って引っ越しをした方が……

素材を扱う楽しさは、誰かに譲れるものではない

—風景はあまり描かない。

風景を見てきれいだなと思うんですけど、だから絵を描くとは、まったくつながらなくて。きれいなものを描きたいとか、自分がいいなって思ったものを描きたいわけではないので。水彩やっているんですけど言うと、風景とかって聞かれるんですけど、心象風景は、風景って言ったら、たぶん勘違いがはじまってしまう。

—水彩は風景に向いている。

その瞬間をとどめたいとか、いま描かなきゃという焦燥感は、いまの自分にはまったくないので、気持ちはなくてもやってみてもいいのかなと思いますね。

—歴史的に水彩は風景画が多いですね。

そうなんです。向いているんですね。

—即興的ではありませんね。

新聞記者兼報道画家として訪日した、イギリスのチャールズ・ワーグマンは油絵だけでなく水彩もお上手で。日本の画家たちが弟子入り志願し、水彩が広まってゆきました。感情を色彩にのせ現場をとどめるという役割に、水彩は適していると

思います。

—携帯しやすいし、乾きも早いし。

まあ、そんなことを考えながら……今すぐ東京から出ていけって言われても、未練はないんですけど。けっこう期限を決めて、3年後には、よし、とにかくここからは出るぞ、と。

—それは愛媛に戻るという意味ではなく。

愛媛とは限らないです。ただ、東京以外の土地で絵を描いて……

—そのときに決めるということですね。

1年生の学生が、うまい人がいっぱいいるのに何で自分が絵を描いているかわからないっていう青春の質問をくれたんですよ。それで、ああ、そうかあって(笑)。

—(笑)

たしかに良い絵は世のなかにいっぱいあるし、自分じゃ描けない良い絵ばかりですよ、それは。でも鑑賞者ではなく、描き手としては、素材を扱う楽しさが特権だと思っていて。この水彩、扱っててたまらんな、と。いまだに初めて扱う気持ちが毎回あるんですけど、その気持ちは、どんなに私が描いたものがダメでも、誰かに譲れるものではない。それは誰にも渡せません、と。思っている。水彩の表情を見て、なんでこんなに気持ちが動かされるんだろうっていう、よくわからないけど、確実に自分がここでしか得られない感情があることを知ってしまった以上、手放すことはできない。そういうぶれないものがあると、不安は消えるんだなと思います。

—とても良い話を聞きました。

水彩をずっと続けることに対しては、まったく不安がないですね。どこに行こうが、水彩画じゃないよねと言われようが……別に、そうですね、と。きっと、どこかに行って、これからも水彩を描き続けるんだと思います。

2022年10月24日、アトリエにて

聞き手:岡村幸宣



野間 祥子 のまさちこ

1991 愛媛県生まれ
2014 武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵専攻 卒業
2016 武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程美術専攻油絵コース 修了

個展
2017 「野間祥子 展」フジキ画廊(東京)
2017 「水のふところ」SILVER SHELL(東京)
2019 「ゆれなずむ」SILVER SHELL(東京)
2021 「透明なしるし」SILVER SHELL(東京)

グループ展
2016 「画廊の夜会-くもり硝子-」村越画廊(東京)
2016 「第3回来展-美大の競演-」日動画廊(東京)
2017 「第8回ふるさと美術展」高知文化プラザかるぼーと(高知),あわぎんホール(徳島)
2017 「ネクステージ」art space kimura ASK?(東京)
2018 「角谷沙奈美・宮本絵梨・野間祥子 三人展」あらかわ画廊(東京)
2018 「画廊の夜会-おいしいものばかり-」村越画廊(東京)
2018 「CDジャケットアート展V」パレットギャラリー麻布十番(東京)
2018 「チョイ怖い絵展」あらかわ画廊(東京)
2018 「装幀画展VI」パレットギャラリー麻布十番(東京)
2019 「2月の庭」ギャラリー枝香庵(東京)
2019 「角谷沙奈美・田制可奈子・野間祥子 三人展」あらかわ画廊(東京)
2019 「絵と音楽と、響きあうほどに」ギャラリー枝香庵(東京)
2019 「山田彩加×野間祥子-今治市出身若手作家展-」今治市玉川近代美術館(愛媛)
2019 「チョイ怖い絵展II」あらかわ画廊(東京)
2019 「クリスマスアートフェスタ2019-The Winter's Tale-」村越画廊(東京)
2020 「田制可奈子・野間祥子 二人展」あらかわ画廊(東京)
2020 「チョイ怖い絵展III」あらかわ画廊(東京)
2020 「第2回 フルーツ展」ギャラリー和田(東京)
2020 「水彩の庭」ギャラリーきっさこ(鹿児島)
2020 「第9回ふるさと美術展」香川県文化会館(香川)
2021 「第33回現代美術展-郷土ゆかりの作家たち-」今治市河野美術館(愛媛)
2021 「干支展」あらかわ画廊(東京)
2021 「水彩の庭2021」ギャラリーきっさこ(鹿児島)
2021 「野間祥子・藤田遼子 二人展」あらかわ画廊(東京)
2021 「はじまりの庭」GalleryStorks(東京)
2021 「SEOUL ART SHOW」COEX(韓国)
2022 「水彩の庭2022」ギャラリーきっさこ(鹿児島)
2022 「はじまりの庭」GalleryStorks(東京)

受賞歴
2014 守谷育英会修学奨励金 奨励賞
2016 美術新人賞デビュー2016 グランプリ
2016 第20回越後湯沢全国童画展 川上四郎記念大賞